Okinawa Prefectural College of Nursing

沖縄県立看護大学紀要第３号(2002年３月)

研究ノート

両親の乳児に対する知覚

－沖縄群と東京都群の比較－

山城桂[1)]　上田礼子[1)]　岡村純[1)]　加藤尚美[1)]　玉城清子[1)]

本研究の目的は、両親の乳児に対する知覚（NPI）について、父親と母親の見方の相違、および、新生児に対する１ヶ月前後の知覚の相違をそれぞれ検討し、養育行動上の支援に役立てることである。

対象は、東京都51組、沖縄県55組、計106組の新生児の両親であった。東京都51組は東京都内の２つの病院を対象とし（以下、東京都群と称する）、沖縄県55組は沖縄県内の３つの病院を対象とした（以下、沖縄群と称する）。対象者に質問紙を２回依頼し、１回目の質問紙は、「一般的な赤ちゃんの知覚（NPI-1)」、２回目の質問紙は1ヶ月後の「自分の赤ちゃんの知覚(NPI-2)」について回答を求めた。

結果と考察；１）父親と母親のNPI-1総得点およびNPI-2総得点それぞれの相関係数は、NPI-1総得点に比べNPI-2総得点が高くなり、1ヶ月後の「自分の赤ちゃんに対する知覚（NPI-2)」が父親と母親でより一致する傾向にあった。２）出生直後NPI-1と１ヶ月後のNPI-2の相関係数は、東京都群、沖縄群とも父親よりも、母親が低かった。これらのことから、出生直後と１ヶ月後の親の知覚は変わること、また、生活する場によってその値はいくらか異なること（東京都郡、あるいは沖縄郡)、東京都群・沖縄群ともに母親は父親よりも１か月後には変化していることが明らかになった。

以上の結果から、NPIにより、同じ子どもでも両親によって見方が異なること、また、両親ともに１ヶ月後には見方に変化が生じること、そして、母親の変化は、父親よりもより変化しやすいことは住む地域が異なっても同様にいえること、等が示唆された。今後、母親と父親の乳児との関わり方・乳児の見方の違いなどを、さらに観察し続け、また、生活する場所等も考慮し、NPI得点から得られる養育上の問題を緩和できるよう、新生児期から関わっていく必要性が示唆された。

キーワード：乳児に対する知覚、養育行動、親子関係

Ⅰ　緒　言

子どもの心理・社会的発達に関与する父親の役割は重要であるとLamb, M.E(1976年)やBiller, H.B.(1974年)は報告している[1) 2)]。一方、これまでにBroussard E.Rは、母親の乳児に対する知覚（NPI；Neonatal Perception Inventory）が、その後の子どもの情緒的発達に関係することを報告し(1970年)[3)]、上田は日本の母親にもNPIが適応できること、およびNPI得点はリスク児の早期発見や親子関係のあり方に関与することを報告している(1982年)[4)]。しかし、父親のNPI及び父母両方のNPIの関係に関する調査は未だ少ない状況にある。今回は、父親と母親の乳児に対する知覚の関係、および、出生直後と１ヵ月後の乳児に対する知覚の関連を検討し、親の養育行動上の支援に資することを目的とした。

Ⅱ　研究方法

調査対象は、1997年～1998年に出生した新生児の父親と母親であった。対象者に対して、出産後に質問紙の記入を２回依頼し、回収した。１回目の質問紙は、「一般的な赤ちゃんの行動に対する知覚（NPI-1)」に関する内容であり、出産直後に行い入院中に回収した。２回目の質問紙は１ヶ月後に「自分の赤ちゃんの行動に関する知覚（NPI-2)」に関する内容であり、郵送法によって回収した。質問の項目は、赤ちゃんの泣くこと、嘔吐、睡眠、排便、習慣形成に関わる行動（表１、表２参照）を５段階で評価する方法で回答を求めた。対象の属性と

表１．一般的な赤ちゃんの質問項目

一般的な赤ちゃんの様子を最もよくあらわしていると思われるものに○印をつけてください（NPI-1)。

１．赤ちゃんは、どのくらい泣くと思いますか。
　非常に多く　かなり　中等度　ごくわずかに　なし

２．赤ちゃんは、どのくらい吐いたりすると思いますか。
　非常に多く　かなり　中等度　ごくわずかに　なし

３．赤ちゃんは、眠りについてどのくらい困ることがあると思いますか。
　非常に多く　かなり　中等度　ごくわずかに　なし

４．赤ちゃんは、排便についてどのくらい困ることがあると思いますか。
　非常に多く　かなり　中等度　ごくわずかに　なし

５．赤ちゃんは、授乳や睡眠の習慣を決めるのにどのくらい困ることがあると思いますか。
　非常に多く　かなり　中等度　ごくわずかに　なし

1）沖縄県立看護大学

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural College of Nursing

表２．私の赤ちゃんの質問項目

あなたの赤ちゃんの様子について最もよくあらわしていると思われるものに○印をつけてください（NPI-2）。

1．赤ちゃんは、どのくらい泣くと思いますか。
　非常に多く　かなり　中等度　ごくわずかに　なし

2．赤ちゃんは、どのくらい吐いたりすると思いますか。
　非常に多く　かなり　中等度　ごくわずかに　なし

3．赤ちゃんは、眠りについてどのくらい困ることがあると思いますか。
　非常に多く　かなり　中等度　ごくわずかに　なし

4．赤ちゃんは、排便についてどのくらい困ることがあると思いますか。
　非常に多く　かなり　中等度　ごくわずかに　なし

5．赤ちゃんは、授乳や睡眠の習慣を決めるのにどのくらい困ることがあると思いますか。
　非常に多く　かなり　中等度　ごくわずかに　なし

して、居住地域、年齢、学歴、家族形態、母親の仕事の有無、子どもの性別、出生順位、出生時体重、分娩時夫の立会いの有無、栄養法などの回答も求めた。分析方法は、赤ちゃんの知覚に関する回答は、「非常に多く」；５点、「かなり」；４点、「中等度」；３点、「ごくわずか」；２点、「無し」；１点として得点化し、父母のそれぞれのNPI-1、NPI-2につき個人毎の総得点を算出した。

Ⅲ　結　果

１．対象の属性

対象は、沖縄県55組、東京都51組、計106組の両親であった。子どもの性別、出生順位、体重、父母の年齢、学歴、母の仕事の有無、妊娠分娩時の異常の有無、栄養法、分娩時立会いの有無、家族形態などは表３のごとくであった。新生児の出生順位は、東京都群では第１子32名（64.0％）、第２子以降18名（36.0％）であり、第１子が多い傾向であったが沖縄群との比較では、有意差が無かった。父母の年齢は、ともに30歳代以上の者が多かった。学歴は中・高卒者は少なかった。沖縄群では、母乳栄養の新生児が有意に多く（67.9％）、一方、東京都群では、混合・人工栄養の新生児が多かった（59.6％）。父の学歴、妊娠分娩異常、栄養法において両群に有意差があり、東京都群に高学歴の者がより多く、妊娠分娩異常の者がより多く、母乳栄養の者がより少なかった。

２．父親と母親の乳児に対する知覚の相関関係

１）沖縄群

①　父親と母親のNPI-1（図１）

沖縄群の父親と母親のNPI-1総得点の相関関係は図１に示すようであった。相関係数0.437であり、（P<0.0001）

表３．対象の属性（上段：沖縄群、下段：東京都群）

		人（%）		人（%）	計
性別	男児	30(54.5)	女児	25(45.5)	55(100.0)
		29(56.9)		22(43.1)	51(100.0)
出生順位	第1子	28(52.8)	第2子以降	25(47.2)	53(100.0)
		32(64.0)		18(36.0)	50(100.0)
父の年齢	20代	19(35.2)	30代以上	35(64.8)	51(100.0)
		14(29.2)		34(70.8)	48(100.0)
母の年齢	20代	24(44.4)	30代以上	30(55.6)	54(100.0)
		15(31.3)		33(68.8)	48(100.0)
父の学歴　＊	大・短大・専門	33(63.5)	中・高卒	19(36.5)	52(100.0)
		38(86.4)		6(13.6)	44(100.0)
母の学歴	大・短大・専門	31(58.5)	中・高卒	22(41.5)	53(100.0)
		36(73.5)		13(26.5)	49(100.0)
母の仕事	無	33(61.1)	有	21(38.9)	54(100.0)
		23(46.9)		26(53.1)	49(100.0)
妊娠分娩異常　＊	無	44(80.0)	有	11(20.0)	55(100.0)
		22(43.1)		29(56.9)	51(100.0)
体重	3000g以上	35(63.6)	3000g未満	20(36.4)	55(100.0)
		30(60.0)		20(40.0)	50(100.0)
栄養法　＊	母乳	36(67.9)	混合・人工	17(32.1)	51(100.0)
		19(40.0)		28(59.6)	47(100.0)
立会い	立会い	20(36.4)	非立会い	35(63.6)	55(100.0)
		25(49.0)		26(51.0)	51(100.0)
家族	核家族	46(88.5)	大家族	6(11.5)	52(100.0)
		47(92.2)		4(7.8)	51(100.0)

＊　P<0.05

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural College of Nursing

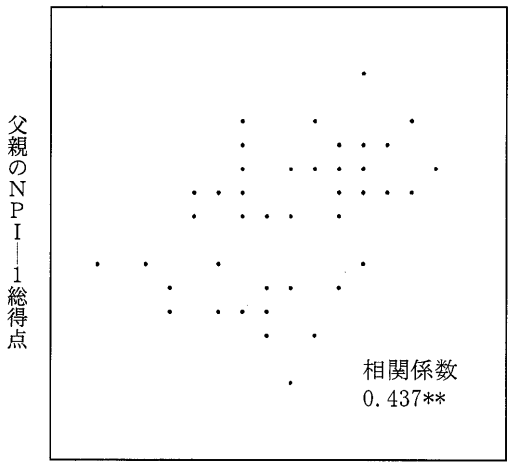

図１　父親と母親のNPI-1（沖縄群）

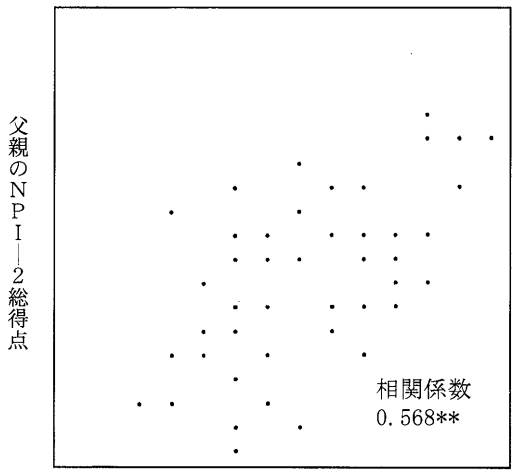

図２　父親と母親のNPI-2（沖縄群）

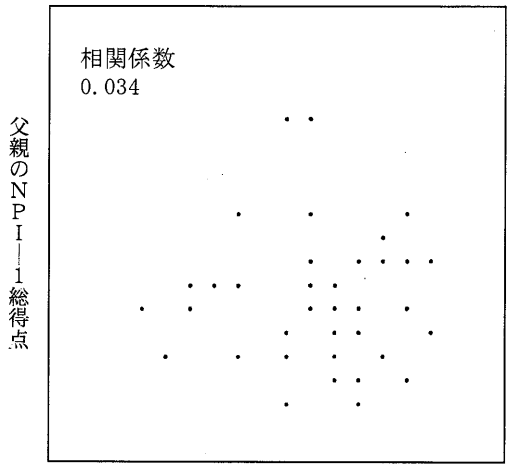

図３　父親と母親のNPI-1（東京都群）

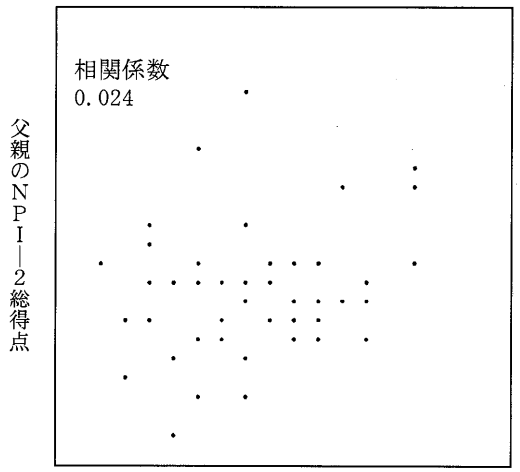

図４　父親と母親のNPI-2（東京都群）

*P<0.005

出生直後の一般的な赤ちゃんに対する知覚について父親と母親との間には弱い相関関係を示していた。

②　父親と母親のNPI-2（図２）

父親と母親のNPI-2総得点の関係は図2に示すごとくであった。相関係数は、0.568であり（P<0.0001)、NPI-1のそれより高かった。出生直後と比べて、1ヶ月後の自分の赤ちゃんに対する父親と母親の知覚は、やや相関係数が高くなっていた。

２）東京都群

NPI-1 、NPI-2は図３と図４に示す如くであった。

東京都群の両親の、出生直後の一般的な赤ちゃんに対する知覚のNPI-1総得点の関係は図３に示すごとくであり、相関係数が0.034であった。また、１ヶ月後の自分の赤ちゃんに対する父親と母親の知覚、NPI-2総得点の相関係数は0.024であり、いずれも低かった。

３．父親および母親のそれぞれのNPI1とNPI2の関係

１）沖縄群

父親のNPI-1 とNPI-2の関係は相関係数が0.401であった。(P<0.005)、出生直後の赤ちゃんに対する知覚と１ヶ月後の自分の赤ちゃんに対する知覚が正の相関関係にあった。(図５)

また、母親のNPI-1 とNPI-2の関係は相関係数が0.377であり（P<0.005)、これは父親の相関係数よりもやや低い値であった。(図６)

２）東京都群（図７，８）

父親のNPI-1 とNPI-2の関係は相関係数が0.646であった（P<0.0001)。出生直後の赤ちゃんに対する知覚と1ヶ月後の自分の赤ちゃんに対する知覚はやや強い相関関係にあった。(図７)

また、母親のNPI-1 とNPI-2の関係は相関係数が0.514であり（P<0.0001)、沖縄群と同様に父親の相関係数よ

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural College of Nursing

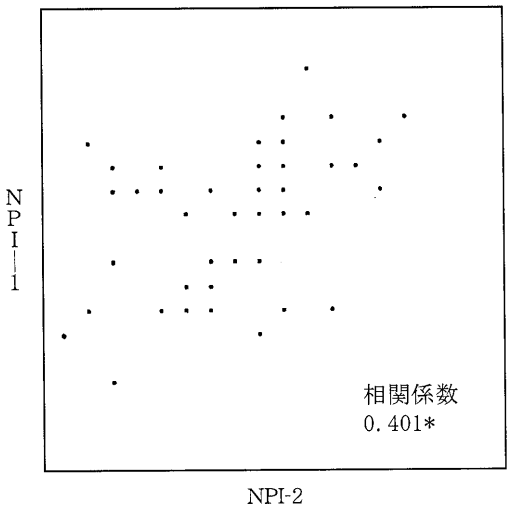

図５　父親のNPI-1とNPI-2の相関関係（沖縄群）

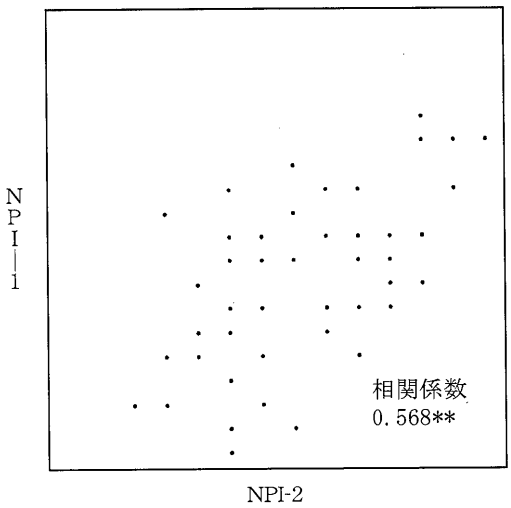

図６　母親のNPI-1とNPI-2の相関関係（沖縄群）

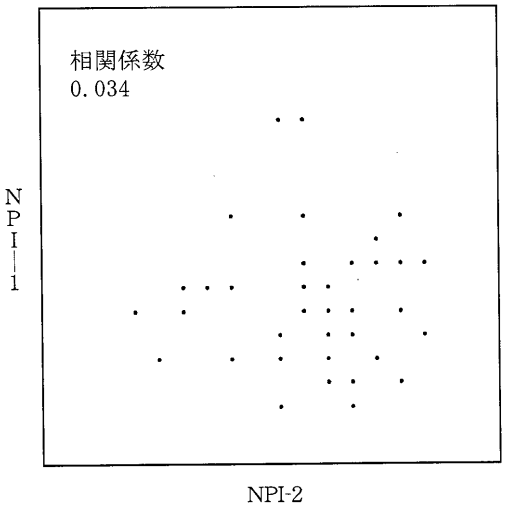

図７　父親のNPI-1とNPI-2の相関関係（東京都群）

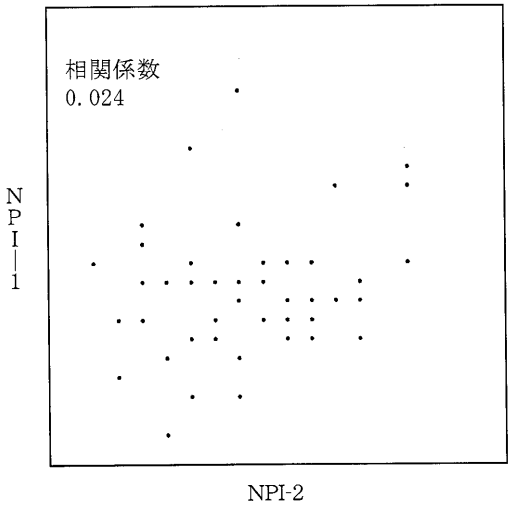

図８　母親のNPI-1とNPI-2の相関関係（東京都群）

*P〈0.005
**P〈0.0001

りも低い値であった。

Ⅳ　考　察

NPIは、母子関係の形成期にある初期の段階において、母親の知覚と乳児の行動との関係を知るひとつの方法として役立つものである。[5]

Broussaurdによれば母親が自分の赤ちゃんを普通の赤ちゃんに比べて肯定的に知覚するかどうかは母親と乳児との相互作用のあり方に影響するという[3]。母親と乳児の関係をより肯定的にするためには、ネガティブな知覚をする親を把握し、その内容を知り軽減を図るよう支援を必要とする。

今回の調査では、両親それぞれのNPI-1総得点とNPI-2総得点の相関関係や、それぞれの出生直後と１ヵ月後の知覚の関係を知ることにより、赤ちゃんについての見方がどう変わって行くのか、また、父親と母親の赤ちゃんに対する見方の違いや、それぞれの傾向について検討した。乳児は母親だけをAttachment の対象とするのではないことが知られている[6]。従って、母親だけでなく、父親の乳児に対する知覚も調べ、母親との相違を知ることによって家族としての養育上の困難や子どものもつ問題を知り、養育上必要とする支援の手がかりにすることができると考える。

沖縄群の父親と母親の乳児に対する知覚の相関関係についてみると、NPI-1総得点よりもNPI-2総得点のほうが父親と母親の相関係数が高かった。これは、１ヵ月後の赤ちゃんに対する父親と母親の知覚がより一致する傾向にあることを意味している。一方、東京都群の父親と母親の乳児に対する知覚の相関係数はNPI-1総得点、NPI-2総得点ともに有意な相関関係は認められず、沖縄

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural College of Nursing

群に比べて父親と母親の子どもの見かたの類似性は低いことを意味している。

ところで、「父親と母親間の養育方針の不一致は、子どもの望ましくない発達と関係がある[7]」あるいは「夫婦の行動レベルの絆と精神レベルの絆は家事・育児の父親の参加協力状態に影響し合う」[8]という見解もあるが、出生間もない時期に既に父親と母親の子どもの知覚に相違があることに注目すべきであろう。そして、両親のNPI得点の一致・不一致が日常の育児行動と関連していると想定される。父母どちらかが明らかに自分の子どもをネガティブに見るという夫婦間の不一致がある場合、専門家の支援も必要となることが予測される。

また、父親および母親のそれぞれのNPI-1総得点とNPI-2総得点の相関係数は、沖縄群・東京都群ともに父親のほうが高い結果であった。これは、両群で父親が赤ちゃんに対して出生時と１か月後であまり変化していないことを意味している。Klaus & Kennelの母子相互作用説[9]によれば、母親は、特に子どもが乳児期には母乳やミルクを与える哺乳行動、抱いたりする行動も多く、子どもとの接触の頻度が一般的に高く、乳児の見かたにも変化が生じやすいことが推測される。対象とする地域を広げてこの結果が今後、他の居住地域でも総じてあてはまるのか否か検討をすすめていく必要があると考える。

一方、Moss(1967)は、母親が出生後最初の３か月間に、彼女の赤ん坊の泣き叫びに反応するかどうか、また、どの程度反応するかは、母親が赤ん坊の誕生する２年前にのべた考えや感情、すなわち家庭生活や一般的な乳児の養育についての考え方や、自分自身の赤ん坊をもつことによってもたらされる喜びや不満の種類についての考え方と相関することをみいだしている[10]。

さらに、母親の乳児に対する見方の違いには、出産前からの夫（男性）との関係が反映されている[9]という知見もあり、出生直後の母親の知覚は、妊娠の過程も含めて考慮すべきであり、子どもをネガティブにみる傾向にある親なら妊娠の経過との関連も否定できない。妊娠・分娩の経過を調べていくこと、親自身の家族関係、人間関係の過去の歴史を知ることも重要だと考えられる。

養育者の愛着行動を触発するには、乳児との接触の機会とその頻度が重要[11]といわれる。特に母子関係の形成に関しては、分娩直後、産褥初期が母親の感受性の高まっている時期（sensitive period）であり、この期間の母子接触の有無がその後に重大な影響を及ぼすという。この時期に、母親の接触頻度の高さがNPI2得点の変化に関与していたと推測される。

さらに、“乳児を見て抱くこと”父親に大きな感動を与えていたことも報告[12]されており、父親が子どもの出生過程をみるよりも、出生直後における父親と乳児との身体的接触が両者の関係形成に決定的要因となると報告されている。母―子相互作用、父―子相互作用、双方において新生児への関わり方、接触の機会等、養育行動を適切に行っていくには新生児期の子どもへの関わり方にも注目すべきことを示唆している。

今回の調査からも両親の間に新生児の時期において知覚に差のあること、居住地域によって程度もかわることが知られた。今後、看護職者は、新生児期からの関わりに関心を持つ必要がある。

以上、沖縄群と東京都群における両親の新生児に対する知覚の相関関係、出生時と１か月後の知覚が父母により違いがあることが明らかになった。また、対象とする居住地域により育児支援に関わる介入のしかたにもいくらか考慮することの必要性が示唆された。

今後、未熟児など子ども側の身体的条件、および父母の仕事の内容、具体的に日常の養育行動など親側の条件と乳児に対する知覚との関係を検討していくことが必要である。

自分の子ども（新生児期）をネガティブに知覚する親の子どもに対する見方の変化、および発達との関係を追跡していくことも必要である。

Ⅴ　結　論

本研究から、(1)NPI-1総得点とNPI-2総得点は必ずしも一致しないが、沖縄群の両親においては一般的赤ちゃんに対する知覚と、１ヶ月後の自分の赤ちゃんに対する知覚の相関は高く有意であった。(2)出生直後と１ヵ月後の赤ちゃんの見かたは父親よりも母親に変化があり、沖縄群・東京都群に共通していた。以上のことから、今後は母親と父親の乳児への関わり方・乳児の見方の違いなどをよく観察し、また、生活する場所等も考慮し、NPI得点から明らかにされる養育上のリスクを軽減すべく、新生児期から関わっていく必要性が示唆された。

Ⅵ　付　記

この報告は第66回日本民族衛生学会、2001年11月那覇市にて報告した。

東京都の資料収集にご協力下さった白川園子氏に感謝致します。

文　献

1）Lamb,M.E.: The role of the father in Child Development, third edition, New York:Wiley, 1-18, 1997.

2）Biller, H.B.: 人格発達と父親，父親剥奪と性役割の

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural College of Nursing

発達, Lamb, M.E., editor, 久米稔, 服部広子, 小関賢, 三島正英訳, 父親の役割―乳幼児発達とのかかわり, 家政教育社, 70-76, 1976.
3）Broussard E.R.,and Hartner,M.S.S.:Maternal perception of the neonate as rerated to development Child Psychiat Hum Dev.1, 16-25, 1970.
4）上田礼子, 小沢道子, 平山宗宏：妊娠・出産・産褥期の適応行動（3）妊娠中と産褥期との関係, 母性衛生, 23(1) 13-16, 1982.
5）上田礼子：子どもの発達のみかたと支援, 中外医学社, 135, 2001.
6）柴田芳枝：看護のなかの母性観,東京経済,28,1999.
7）D.B.リン著：父親　その役割と子どもの発達, 北大路書房, 438, 1986.
8）新道幸恵：乳幼児期の育児と夫婦関係の関連性について（第２報：父親を対象とした研究結果), 第40回日本小児保健学会講演集, 128, 1994.
9）上田礼子：親と子の保健と看護, 日本小児医事出版社, 58, 76-79, 1999.
10）J.ボウルビー、黒田実郎、他訳：母子関係の理論新版、Ｉ愛着行動, 403, 1997.
11）上田礼子：発達のダイナミックスと地域性, ミネルヴァ書房, 166, 170, 1998.
12）上田礼子：生涯人間発達学, 三輪書店, 84-85, 1996.

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural College of Nursing

Journal of Okinawa Prefectural College of Nursing No. 3 March 2002.

Parents' perception of their babies for primary intervention

— Comparison between Parents in Okinawa and Tokyo —

Yamashiro Katsura B.H.S.[1] Ueda Reiko D.M.Sci[1] Okamura Jun M.H.Sci[1]
Kato Naomi, R.N.M.,B.A[1] Tamashiro Kiyoko M.P.H[1]

The purpose of this study is to analyze the parent's perception of their babies, the similarities and differences of their perception between fathers and mothers, and different perception between immediately after child's birth and one month after for primary intervention.

Subjects were the parents of 51 pairs in Tokyo, 55 pairs in Okinawa, and a total of 106 pairs with newborn infants. Questionnaires were requested twice. The first question was about, "an average baby's perception". After one month of the child's birth, the second question was asked about "their own baby's perception".

Result and discussion; 1) As for the correlation coefficient of the NPI1 and NPI2 of parents, NPI2 became higher than NPI1, which indicated that perception of fathers or mothers, was more similar than one month before. 2) As for the correlation coefficient of the NPI1 and NPI2, the mother was lower than the father, in both group. From these findings, it becomes clear that the perception of the parents immediately after birth and of one month after changes, and it is that some values change with place in which they live, after one month, the mother's is changing rather than father in both group.

Conclusion; It was suggested that of the same child one could say that 1) Parent's perception between mother and father was not the same. 2) Both mother and father had changed perception from child's birth one month after. 3) It was common in two areas (Okinawa and Tokyo)that mother's perception had changed more than that of father's in two of the result. Further study is needed in child rearing of mother's and father's, differ ent perception of babies between parents in order to reduce problems of child rearing which could be observed from NPI score.

Key word: Neonatal Perception Inventory, Primary intervention, Child-parent relationship.

1) Okinawa Prefectural College of Nuring

NII-Electronic Library Service